



3級 第2回

主語と述語（2）



一般社団法人

日本ビジネス要約協会

Japan Business Digest Association

主語と述語（2）

■説明

前回は、主語とは主人公であること、述語は「何をしたのか」または「どうなのか」を表す文言であること、そして主語と述語は「必ず一対」で表現しなければいけないことを学びました。今回は、述語をどのように特定するのかについて説明します。述語とは、何が「どうしたのか」または「どうなのか」を表す言葉です。ということは、ビジネス文書を理解し要約する際の述部とは、文章の中で一番伝えたいことであり、核となる主張ということになります。では、文章の中からこの核となる文章を抜き出すにはどうしたらよいか、そのポイントは2つです。

①事実と意見を分ける

ビジネス文書の中には、事実と意見（主張）の2種類の文章があります。なぜなら、何かを主張し伝えるためには、その主張の根拠となる事実を提示する必要があるからです。

「事実（根拠）」⇒「主張（結論）」

という関係性ですね。ですから、たくさんある文章の中から書き手の一番伝えたいことを抜き出すためには、まず「主張（意見）」の文章を探しだすことが肝要となります。

ちなみに、アメリカでは小学生で習う内容とのことですよ。

②「本当に」と自問自答する

主張（意見）文は文章の大きな塊の中に複数存在していますので、複数の主張の中から一つの主張をピックアップしなければいけません。この時に用いる手法は、「本当に」という言葉を用いて自問自答することです。

「“本当に”書き手はこのことを伝えたいのか」

この文言を繰り返し問い続けてください。その際の「本当に」とは、「文章の因果を捉えて最後の最後の場面で伝えたい」という意味で捉えてください。それを私たちは、「シンデレラエクスプレス手法」と呼んでいます。一昔前の話ですが、遠距離恋愛するカップルが別れを惜しむ日曜日の東京発最終新幹線を「シンデレラエクスプレス」と呼んでいた時期があります。その別れの際に交わす言葉は、まさか「明日の天気は何かなあ」なんて言葉ではありませんよね。この最後に交わす言葉こそが「本当に伝えたい言葉」です。主張文を一つに絞る時には「本当に」と自問自答してくださいね。

■例題と解説

では、例題として以下の文章を確認しましょう。

▼男性は外出が好きだった。オランダのような施設があれば、事故も訴訟も防げたのかもしれない。このオランダの施設には「新手の隔離施設だ」などの批判もある。入居費も安くはないが、今後の取り組みへのヒントを得ようと各国から視察が相次ぐ。なるべく普通の生活を続けさせようという発想が光るからではないか。

(2016/3/1 付日本経済新聞 朝刊 第4段落)

この文章を、まず事実と意見に分けましょう。すると以下のように分類できます。

- ①男性は外出が好きだった。(事実)
- ②オランダのような施設があれば、事故も訴訟も防げたのかもしれない。(意見)
- ③このオランダの施設には「新手の隔離施設だ」などの批判もある。(事実)
- ④入居費も安くはないが、今後の取り組みへのヒントを得ようと各国から視察が相次ぐ。(事実)
- ⑤なるべく普通の生活を続けさせようという発想が光るからではないか。(意見)

よって、主張（意見）として「事故や訴訟を防げたのかもしれない。」と「普通の生活を続けさせようという発想が光るからではないか。」とが抽出できます。

では、どちらの主張を特定すべきでしょうか。早速、文章の因果関係を調べ「本当に」伝えたいことを探していきましょう。まず3行目に、このオランダの施設には各国から視察が相次いでいる、という状況が述べられています。なぜか？ それは今後の取り組みのヒントが得られるからです。では、今後の取り組みとは何か？ それは認知症の人たちの事故や訴訟を防ぐ取り組みです。では、施設のどこからヒントを得られるのか？ それは、なるべく普通の生活を続けさせようという光る発想です。

以上の文章のつながりから、事故や訴訟を防ぐためには、普通の生活を続けさせようという発想が取り組みのヒントになると意見がつながっていることが分かります。つまり、「事故や訴訟を防ぐ」は「普通の生活を続けさせようという発想が取り組みのヒントになる」の目的なのです。よって、今回の主張は、目的を達成するための手段である「普通の生活を続けさせようという発想が光るからではないか」と特定することができます。

■前回の課題の解答・解説

＜問題再掲＞

以下の春秋の核となる文章を主語と述語だけの一文で形成してください。

▼NHK「新日本紀行」や「きょうの料理」のテーマ、さらにはアニメ「ジャングル大帝」など富田勲さんの曲には誰の耳にもなじむ親しみやすさがある。そこへ前衛の一さじも加わり、旋律は長く心に残った。テレビを生活に定着させる面でも一役買ったと言っている。

▼1970年代、米国から苦心の末にシンセサイザーを輸入した後は、未知の機器との格闘を制し、革新的曲作りに突き進んだ。「月の光」「展覧会の絵」「惑星」などの作品群はスタジオで膨大な時間と手間をかけ編み上げられた。映画監督のフランシス・ Coppolaさんら多くの芸術家にインスピレーションを授けている。

▼音響の極限に挑むかのように国内外で「サウンドクラウド」と呼ばれるイベントを仕掛けたほか、ボーカル音源を持つキャラ、初音ミクとの「共演」も果たしている。音楽の最先端に身を置き続け世を去った。対談などで「今は安価で高性能な機器がたくさんある」と恵まれた境遇の後進に奮起を促すことも忘れなかった。

▼「…音の色合いの出し方にしても、全く際限がない。したがって自分自身がさらけ出してしまうこわさもある…。富田さんはアルバム「月の光」で電子音楽への思いをこう書いている。道を開き、井戸を掘った第一人者にも未来へのおののきがあった。AI（人工知能）の技術の前にすくみがちな我々への一灯とも思える。

(2016/5/10 付日本経済新聞 朝刊)

みなさん、うまく主語と述語を抜き出すことができましたでしょうか。

この場合、まずは「核となる」筆者の主張を捉えることが必要となります。主張とは、筆者が一番伝えたかったことです。今回の＜主張＞は、「(人工知能の技術の前にすくみがちな)『我々への一灯とも思える。』」でした。これで述語は確定しました。

では、何が「我々への一灯とも思える。」のか、ここは「おののき」なのか「道を開き、井戸を掘った富田氏の奮起」なのか迷われた方も多いかもしれませんが、このような場合は、とにかく余分な言葉をそぎ落としていくことで主語を特定することができます。

「おののきが一灯とも思える」と「奮起が一灯とも思える」とでは、当然後者の文章に妥当性がありますよね。よって今回の解答は、「奮起が一灯とも思える」となります。後

は、この主述の文章に説明を付け加えていけば要約文の完成となります。

ちなみに今回の要約は、言葉を分かりやすいように変換して、

未	来	を	恐	れ	つ	つ	最	先	端	音	楽	に	挑	ん	だ	故	富	田	氏	
の	足	跡	は	、	人	工	知	能	に	す	く	む	我	々	へ	の	道	標	だ	。

となります。

ご参考までに。